

青年期女子の性役割観における『保守化』現象の再検討 II

— 青年期男子・父母世代・祖父母世代の比較から —

山根 律子・別井 春香・宮内 萌

Reconsideration of a swing towards conservatism regarding gender roles of adolescent women II

— From the view of the comparison in adolescent men, their parents' generation, and their grandparents' generation —

Ritsuko Yamane, Haruka Betsui, Moe Miyauchi

Aoyamagakuin University

abstract

This study examined the phenomenon which is seen as a swing towards conservatism regarding gender roles of adolescent women. We compared what adolescent women consider as the "ideal gender role in society" and "their own desired gender role" to that of adolescent men, their parents' generation, and their grandparents' generation.

As a result, adolescent women thought it would be desirable to have a society in which men also assume roles which had traditionally been considered as women's roles. However, unlike their grandmother's generation who experienced the woman's liberation movement, they did not wish to assume conventional male roles. Moreover, they did not actively wish to assume the conventional female roles either.

The phenomenon seen as a *swing towards conservatism* can be considered as a phenomenon reflecting freedom of choice in a society where the equality of men and women are considered as a given.

Key Words: Sexual roles, conservatism, adolescent women, generation gaps

注1：本研究は、2016年度心理学演習IV A で本研究の共著者である別井（2016年度心理学科4年・現卒業生）・宮内（2016年度心理学科3年生・現卒業生）により出された問題意識に基づき本研究計画を立案し、2017年度に著者らで調査を実施したものの一部を筆頭著者が分析を行い、論文としてまとめた。

問題

平成11年に男女共同参画社会基本法が公布・施行され、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」（男女共同参画社会基本法第2条第一項）と男女の対等かつ平等な社会参加がうたわれ、平成27年には第4次男女共同参画基本計画が策定されるなど、日本社会はあらゆる分野での男女の社会参画がなされるよう整備されてきた。その一方で、専門的な分野や管理職における女性の比率は諸外国に比べ未だ低く（内閣府共同参画局、2016）、その背後に女性達自身がそのような仕事に就くことを望まない、とする指摘もある（奥田、2015）。男女共同参画社会が推進されていく中で、当の女性達は自らの生き方についてどのように考え、どのように望んでいるのだろうか。

これについて、近年指摘され始めたのが若い女性の「保守化」といわれる「伝統的なジェンダー観を支持する層」（谷田川、2007）がみられるとの指摘である。20～30代の若年女性が全体的趨勢とは逆に、「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」とする性別役割分業を再評価する動向がみられることを示している（松田、2005）。この「保守化」と言われる現象について、山根・別井・宮内（2017）は現代の女子大学生を対象とした調査を行い、家庭内でどのような役割をどの程度担いたいのか、の設問をもとにクラスター分析を行った結果から、すべての家庭内役割を積極的に担おうとする「積極的役割分担群」、家庭内役割を担うこと全体に消極的な「消極的役割分担群」、「家事」「育児」「しつけ」は求められたいが「稼ぎ手」「家族代表」は求められたくない「介護」についてもあまり求められたくない「伝統的役割分担群」を抽出した。この「伝統的役割分担群」は「介護」を別にすれば「保守化」傾向の強い層と捉えられるが、全体の約16%であり多くはなかった。

このような若年女性の「保守化」と言われる現象が一部に確認されたが、それでは現代の男女共

同参画社会を生きる同世代の男性はどのような役割を望んでいるのだろうか、また男女の役割が固定化された社会で育ちウーマンリボリューションを経験した世代、さらにそこからウーマンリボリューション後の男女共同参画へと社会が変化していく時代に育った世代とでどのように異なっているのだろうか。本研究では、これらの時代を経験した三世代に焦点をあて、男女の性役割への意識と自身の希望における世代間の違いおよび男女による違いを調べ、一部の若年女性の有する「保守化」と言われる現象と対比して、男女それぞれの社会の変遷に伴う性役割意識について明らかにする。

方法

調査協力者

調査は、青年期男女、その親世代、祖父母世代に実施した。青年期男子・女子は首都圏の私立大学である本学の大学学生の協力を得た。親世代、祖父母世代は、協力をいただいた学生の保護者、祖父母および知縁法により協力者を募った。分析対象者は、女子学生は山根・別井・宮内（2007）と同一の162名（平均年齢19.13歳、SD1.06歳）であり、男子学生は38名、母親世代（40代・50代）35名、父親世代（40代・50代）28名、祖母世代（60代・70代）32名、祖父世代（60代・70代）22名を分析対象とした。

調査手続き

2017年7月から10月に調査を実施した。大学生については授業時間内に行いその場で回収したものと、その他の時間に調査協力を依頼し、その場で回収、あるいは後日回収したものを含めた。親世代、祖父母世代は、手渡しまたは郵送で依頼し、無記名で返送を求めた。調査については、回答は任意であり、回答しないことによる不利益がないことをフェイスシートに記し、理解を得た上で行った。

質問紙の構成

質問紙は、同一の質問項目について、Ⅰは今の社会が求めている性役割についての認識を問うもの、Ⅱは望ましいと考える性役割社会のあり方について問うもの、Ⅲは自分自身が求める性役割について問うもの、Ⅳは社会から求められる性役割により受けているストレス、の4種を行った。このうち、本研究では、ⅡとⅢの結果を用いた。Ⅱでは『『どのような性役割社会が望ましいか』について伺います。あなたが考える望ましい社会は、[①男性／②女性]のあり方として、どの程度[そうする／そうある]ことが求められる社会がよいと思いますか、と教示した。Ⅲでは自分自身が求める性役割について問い、『『自分が望む性役割』について伺います。あなた自身は、どの程度[そうする／そうある]ことを求められたいですか』と教示した。Ⅱでは、①男性にどの程度求められるか、②女性にどの程度求められるか、両性について回答を求めた。

調査項目は、Ⅱ、Ⅲとも同一で、5つの領域①社会的な立場や役割への期待②人柄③結婚や出産についての選択④家庭内での役割⑤結婚相手の家や家族への役割と選択、で構成された。これらは従来より男女に期待される役割として差が指摘されてきた項目（若松・柏木1984；柏木1975；守2010他）を中心に取り上げ、社会的な期待（以下ステータスとする）について「教養」「高い経済力」「高学歴」「魅力的容姿」「仕事の安定」「社会的高地位（以下「高地位」とする）」「若々しい印象」を取り上げ、人柄にもとめられる特性（以下人柄とする）として、「穏やか」「従順」「冷静」「気配り」「思いやり」「自信」「他者を敬う（以下「敬う」とする）」「積極的」「強い意志」を取り上げた。さらに、結婚・子どもをもつことへの意識を「結婚する（以下「結婚」とする）」「20代のうちに結婚する（以下「20代結婚」とする）」「子どもをもつ」「離婚歴がない（以下「無離婚歴」とする）」の各項目と、結婚後の家庭内での役割分担（以下家庭内役割とする）について、「主に家事を担う（以下「家事」とする）」「主な稼ぎ手となる（以下「稼ぎ手」とする）」「主に育児を担う（以下「育児」とする）」「家族を代表する役割を担う（以下「家族代表」とする）」「主に子どものしつけを担う（以

下「しつけ」とする）」、「主に家族の介護を担う（以下「介護」とする）」についてたずねた。また、結婚後の結婚相手の家や家族への役割と選択（以下婚家とする）について、「結婚相手の親の世話をする（以下「親の世話」とする）」、「結婚相手の家族と同居する（以下「同居」とする）」、「結婚相手の家の宗教に従う（以下「宗教」とする）」、「結婚したら相手の姓を名乗る（以下「姓」とする）」、「結婚相手の家のお墓に入る（以下「お墓」とする）」の5項目を扱った。

回答はⅡ「まったくそうあることを求められていない（求められたくない）」（括弧内はⅢ、以下同様）を1とし、「あまりそうあることを求められていない（求められたくない）」「どちらでもない」「かなりそうあることを求められている（求められたい）」「非常にそうあることを求められている（求められたい）」を5とする5件法で行った。

分析

回答の1から5の5件法の数値をそれぞれの項目の得点として処理した。分析はIBMのSPSSバージョン25を使用した。

結果と考察

望ましい性役割社会についての認識

「望ましい性役割社会」では、それぞれの項目を「男性は」と「女性は」に分けて回答を求めた。各々の項目ごとに、全世代の男女で「男性は」の得点と「女性は」の得点の差を調べた（t検定、表1「男女差検定結果」参照）。その結果、ステータスや人柄では多くの項目で男性に求める度合いと女性に求める度合いに有意差がみられ、伝統的な男性女性観を踏襲した男女差がみられた。そのなかで「教養がある」には男女差がなく、人柄では「気配り」「思いやり」他者を「敬う」ことに男女差はみられなかった。すなわち、望ましい性役割社会では、伝統的な性別に伴うステータスやイメージは維持されていたが、気配りや思いやり、他者を敬うことなどは性別にかかわらず必要な資質と考えられていた。結婚と子どもをもつこと、

表1 「Ⅱ．望ましい性役割社会」の男女・年代別平均と検定結果

	女子学生	男子学生	母親世代	父親世代	祖母世代	祖父世代	女子学生	男子学生	母親世代	父親世代	祖母世代	祖父世代	女子学生	男子学生	母親世代	父親世代	祖母世代	祖父世代
〔Ⅱ〕ステータス男性〔男女差検定結果〕	〔Ⅱ〕男性	教養がある	[n. s.]				〔Ⅱ〕男性高経済力	〔男性＞女性***〕					〔Ⅱ〕男性高学歴	〔男性＞女性***〕				
平均値	4.3	4.4	3.8	4.3	4.0	4.0	4.1	4.2	3.8	4.0	4.0	3.9	3.8	3.9	3.4	3.5	3.6	3.3
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学・男学>母親					n. s.						n. s.					
〔Ⅱ〕ステータス女性	〔Ⅱ〕女性	教養がある					〔Ⅱ〕女性高経済力						〔Ⅱ〕女性高学歴					
平均値	4.3	5.2	3.6	4.0	3.9	3.8	3.7	3.6	3.3	3.5	3.7	3.5	3.6	3.5	3.2	3.3	3.4	3.3
年代男女間差有意確率・多重比較結果	n. s.						n. s.						n. s.					
〔Ⅱ〕ステータス男性〔男女差検定結果〕	〔Ⅱ〕男性	魅力的容姿	〔男性＜女性***〕				〔Ⅱ〕男性仕事の安定	〔男性＞女性***〕					〔Ⅱ〕男性高地位	〔男性＞女性***〕				
平均値	3.4	3.6	2.9	3.3	3.1	3.3	4.3	4.3	3.8	4.1	3.9	4.0	3.7	3.8	3.3	3.3	3.5	3.2
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.05	女学>母親					p<.01	女学>母親					p<.05					
〔Ⅱ〕ステータス女性	〔Ⅱ〕女性	魅力的容姿					〔Ⅱ〕女性仕事の安定						〔Ⅱ〕女性高地位					
平均値	3.6	3.8	3.1	3.3	3.4	3.5	3.9	3.7	3.4	3.7	3.5	3.6	3.5	3.2	3.0	3.1	3.1	3.2
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.05	男学>母親					p<.01	女学>母親					p<.05	女学>母親				
〔Ⅱ〕ステータス男性〔男女差検定結果〕	〔Ⅱ〕男性	若々しい印象	〔男性＜女性***〕															
平均値	3.2	3.4	3.1	3.5	3.4	3.3												
年代男女間差有意確率・多重比較結果	n. s.																	
〔Ⅱ〕ステータス女性	〔Ⅱ〕女性	若々しい印象																
平均値	3.6	3.6	3.4	3.6	3.5	3.5												
年代男女間差有意確率・多重比較結果	n. s.																	
〔Ⅱ〕人柄	〔Ⅱ〕男性	穏やか	〔男性＜女性**〕				〔Ⅱ〕男性従順	〔男性＜女性***〕					〔Ⅱ〕男性冷静	〔男性＞女性*〕				
平均値	4.4	4.4	3.9	4.1	3.9	3.9	3.4	3.4	3.2	3.2	3.1	3.1	4.3	4.2	3.9	4.2	3.7	4.1
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>母親・祖母・祖父、男学>母親					n. s.						p<.001	女学>母親・祖母				
〔Ⅱ〕人柄 女性	〔Ⅱ〕女性	人柄 穏やか					〔Ⅱ〕女性従順						〔Ⅱ〕女性冷静					
平均値	4.5	4.5	4.1	4.2	3.9	4.0	3.6	3.6	3.3	3.2	3.2	3.2	4.3	4.2	3.9	4.2	3.7	3.9
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>母親・祖母・祖父、男学>祖母					n. s.						p<.001	女学>母親・祖母				
〔Ⅱ〕人柄 男性	〔Ⅱ〕男性	気配り	[n. s.]				〔Ⅱ〕男性思いやり	[n. s.]					〔Ⅱ〕男性自信	〔男性＞女性**〕				
平均値	4.7	4.5	4.0	4.1	3.8	4.1	4.7	4.5	4.1	4.2	4.0	4.1	4.2	4.2	3.9	4.0	3.8	3.8
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>母親・父親・祖母・祖父、男学>母親・祖母					p<.001	女学>母親・父親・祖母・祖父、男学>祖母					p<.05					
〔Ⅱ〕人柄 女性	〔Ⅱ〕女性	気配り					〔Ⅱ〕女性思いやり						〔Ⅱ〕女性自信					
平均値	4.6	4.4	4.0	4.2	4.0	4.1	4.6	4.5	4.1	4.2	4.0	4.1	4.1	4.2	3.8	3.8	3.6	3.7
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>母親・父親・祖母・祖父					p<.001	女学>母親・父親・祖母・祖父、男学>祖母					p<.001	女学>祖母				
〔Ⅱ〕人柄 男性	〔Ⅱ〕男性	敬う	[n. s.]				〔Ⅱ〕男性積極的	〔男性＜女性***〕					〔Ⅱ〕男性強い意志	〔男性＞女性***〕				
平均値	4.5	4.3	3.9	4.0	3.8	4.0	4.3	4.2	3.8	4.0	4.0	4.0	4.3	4.4	3.8	4.1	3.9	4.1
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>母親・父親・祖母・祖父					p<.05	女学>母親					p<.001	女学・男学>母親				
〔Ⅱ〕人柄 女性	〔Ⅱ〕女性	敬う					〔Ⅱ〕女性積極的						〔Ⅱ〕女性強い意志					
平均値	4.5	4.3	4.0	4.1	3.9	4.0	4.2	4.2	3.7	3.8	3.8	3.8	4.3	4.2	3.7	3.9	3.8	3.9
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>母親・祖母					p<.01	女学>母親					p<.001	女学>母親・祖母・祖父				
〔Ⅱ〕結婚出産 男性	〔Ⅱ〕男性	結婚する	〔男性＜女性*〕				〔Ⅱ〕男性20代結婚	〔男性＜女性***〕					〔Ⅱ〕男性子どもをもつ	〔男性＜女性***〕				
平均値	3.8	4.2	3.5	3.8	3.7	3.8	3.0	3.5	2.7	3.0	2.9	3.0	3.7	4.0	3.4	3.6	3.6	3.7
男女年代間差有意確率・多重比較結果	n. s.						p<.05	男学>母親					n. s.					
〔Ⅱ〕結婚出産 女性	〔Ⅱ〕女性	結婚する					〔Ⅱ〕女性20代結婚						〔Ⅱ〕女性子どもをもつ					
平均値	3.9	4.3	3.6	3.8	3.7	3.9	3.3	3.7	2.8	3.3	3.1	3.3	3.8	3.9	3.5	3.7	3.8	4.0
男女年代間差有意確率・多重比較結果	n. s.						p<.05	男学>母親					n. s.					
〔Ⅱ〕結婚出産 男性	〔Ⅱ〕男性	無離婚歴	[n. s.]															
平均値	3.4	3.5	2.9	3.2	3.0	2.9												
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.05																	
〔Ⅱ〕結婚出産 女性	〔Ⅱ〕女性	無離婚歴																
平均値	3.5	3.5	2.9	3.3	3.0	3.0												
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.05																	
〔Ⅱ〕家庭役割 男性	〔Ⅱ〕男性	家事	〔男性＜女性***〕				〔Ⅱ〕男性稼ぎ手	〔男性＞女性***〕					〔Ⅱ〕男性育児	〔男性＜女性***〕				
平均値	3.6	3.4	3.0	3.3	3.0	2.9	4.2	4.2	3.7	4.0	3.6	3.9	3.6	3.6	2.9	3.2	3.1	3.0
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>母親・祖母・祖父					p<.01	女学>祖母					p<.001	女学>母親・祖母・祖父				
〔Ⅱ〕家庭役割 女性	〔Ⅱ〕女性	家事					〔Ⅱ〕女性稼ぎ手						〔Ⅱ〕女性育児					
平均値	4.1	4.0	3.3	3.8	3.5	3.9	3.3	3.2	2.9	3.3	3.0	3.1	4.1	3.9	3.4	3.9	3.5	3.9
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>母親・祖母、男学>祖母					p<.05						p<.001	女学>母親・祖母				
〔Ⅱ〕家庭役割 男性	〔Ⅱ〕男性	家族代表	〔男性＞女性***〕				〔Ⅱ〕男性しつけ	〔男性＜女性***〕					〔Ⅱ〕男性介護	〔男性＜女性***〕				
平均値	4.2	4.2	3.8	4.1	3.5	4.0	3.7	3.7	3.2	3.7	3.3	3.4	3.6	3.6	3.1	3.4	3.3	3.1
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.01	女学・男学>祖母					p<.01	女学>母親					p<.05					
〔Ⅱ〕家庭役割 女性	〔Ⅱ〕女性	家族代表					〔Ⅱ〕女性しつけ						〔Ⅱ〕女性介護					
平均値	3.4	3.3	2.9	3.4	2.9	3.2	4.0	3.8	3.5	3.9	3.4	3.6	3.7	3.7	3.3	3.5	3.4	3.7
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.05	女学>母親					p<.001	女学>母親・祖母					n. s.					
〔Ⅱ〕婚家 男性	〔Ⅱ〕男性	親の世話	[n. s.]				〔Ⅱ〕男性同居	[n. s.]					〔Ⅱ〕男性宗教	〔男性＜女性***〕				
平均値	3.4	3.4	3.2	3.3	3.2	3.3	2.7	2.6	3.1	2.9	2.7	2.6	2.2	2.4	2.4	2.2	2.0	2.3
男女年代間差有意確率・多重比較結果	n. s.						n. s.						n. s.					
〔Ⅱ〕婚家 女性	〔Ⅱ〕女性	親の世話					〔Ⅱ〕女性同居						〔Ⅱ〕女性宗教					
平均値	3.4	3.5	2.9	3.6	3.3	3.6	2.8	2.8	2.7	2.9	2.8	2.9	2.4	2.6	2.2	2.3	2.1	2.6
男女年代間差有意確率・多重比較結果	n. s.						n. s.											
〔Ⅱ〕婚家 男性	〔Ⅱ〕男性	姓	〔男性＜女性***〕				〔Ⅱ〕男性お墓	〔男性＜女性***〕										
平均値	2.4	2.6	2.7	2.3	2.4	2.6	2.4	2.7	2.5	2.4	2.4	2.5						
男女年代間差有意確率・多重比較結果	n. s.						n. s.											
〔Ⅱ〕婚家 女性	〔Ⅱ〕女性	姓					〔Ⅱ〕女性お墓											
平均値	3.2	3.5	2.8	3.0	2.7	3.0	2.8	3.2	2.7	3.1	2.6	3.0						
男女年代間差有意確率・多重比較結果	p<.05						n. s.											

[] 内は男女間差の検定結果を示す。 ***p<.001 **p<.01 *p<.05

多重比較結果は、p<.05以下のもののみ記入。「女学」は女子学生、「男学」は男子学生を示す。

家庭内での役割についても、「無離婚歴」には男女差がみられなかったが、「結婚する」「20代で結婚する」「子どもを持つ」で男性よりも女性が高い。家庭役割では、「家事」「育児」「しつけ」「介護」では男性よりも女性が高い。稼ぎ手」「家族代表」は女性よりも男性が高く、これまでの男女の役割分担が維持されていた。一方で、婚家に合わせる傾向は、婚家の「親の世話」、婚家の親との「同居」は男女差がみられず、婚家の「宗教」に合わせる、婚家の「姓」を名のる、「お墓」に入る、では男性よりも女性が高く、婚家との関係では親との関係性に変化がみられた。

男女世代別（女子学生・男子学生・母親世代・父親世代・祖母世代・祖父世代）に「男性は（以下男性）」得点と「女性は（以下女性）」得点とを比較した（一元配置の分散分析、表1 男女年代間差有意確率・多重比較結果参照）。その結果、ステータスの男性・女性の「魅力的容姿」で男子学生が母親より高く、男性・女性の「仕事の安定」では女子学生が母親より高く、男性の「教養」が男子学生・女子学生で、女性の「高地位」が女子学生で母親より高かった。この結果からは、母親と学生のギャップが認められるが、加えて従来男性に求められていたものが女子学生で高く、従来女性に求められていたものが男子学生で高いことがわかる。すなわち、母親世代よりも若い世代では性による差が減少していた。人柄については「従順」以外のすべての項目で世代間差がみられ、男性・女性の「穏やか」「冷静」「気配り」「思いやり」「自信」、他者を「敬う」「積極的」「強い意志」のいずれも女子学生が母親、あるいは祖母、祖父よりも高く、女子学生は性別にかかわらずこれらの特性を求められる社会が望ましいととらえていた。男子学生は男性・女性の「穏やか」「思いやり」「気配り」男性の「強い意志」で母親や祖母よりも高く、従来女性により強く求められていた人柄が男性にも求められる社会を望ましいと考えていた。結婚出産では、男性・女性ともに「20代で結婚する」で男子学生は母親世代よりも高かった。また、家庭役割では、女性「介護」のみに世代間差がみられず、他のすべての項目で世代間差がみられ、男性・女性「家事」男性「稼ぎ手」「育

児」「家族代表」「しつけ」で、女子学生が母親あるいは祖母よりも高く、男性・女性ともにその役割を担うことが望ましいととらえていた。婚家についての意識では、すべての項目で世代間差はなかった。

世代と男女の2要因で分散分析を行った結果からは、どの項目も交互作用はみられず、男性・女性「若々しい印象」、女性「高経済力」、男性「従順」以外のステータスと人柄項目すべてで世代間の主効果が見られ、若年世代が高かった。結婚子どもをもつこと、家庭役割、婚家では、女性の「子どもをもつ」、男性婚家の「親の世話」「同居」「宗教」「姓」、女性の「同居」「宗教」「お墓」以外に世代の主効果がみられ、いずれも若年世代が高かった。親世代と祖父母世代間差がみられたのは、男性の「冷静」女性の「育児」「家族代表」、婚家の「親の世話」でいずれも祖父母世代が親世代よりも有意に高かった。男女の主効果はステータスと人柄にはみられず、男性の「子どもをもつ」（女性＞男性）、女性の「無離婚歴」（女性＜男性）、女性の「しつけ」（女性＞男性）、男性の婚家「同居」（女性＞男性）がいずれも有意傾向であった。

これらの結果からは、若い世代にとっての望ましい性役割社会は伝統的な性別にともなう男女のイメージや役割観は維持されていることがわかる。その中で若年世代は、これまで男性に求められていたものを女性にも、女性に求められていたものを男性にも求めつつあった。世代間の差をみた結果では、多くの世代間差は女子学生と母親世代との間に認められたことが特徴的であった。望ましい性役割社会観では、若い女性は従来の女性イメージや役割も母親や祖母よりも積極的に受け入れ、一方で男性にも女性イメージや役割であったものを母親、祖母、祖父よりも求めている。同時に男性イメージや男性役割も、母親や祖母よりも担う社会が望ましいと捉えていた。

一方で、親世代、祖父母世代間にみられる世代間差では、多くの項目で母親世代が若年世代との間に有意差が見られるなか、父親世代は、男性に求められる項目、女性に求められる項目ともに母親世代と若年世代の中間や若年世代に近かった。家庭役割における従来の男性「家事」女性「稼ぎ

表2 III「自分が望む性役割」の男女・年代別平均（SD）と検定結果

	女子学生	男子学生	母親世代	父親世代	祖母世代	祖父世代	女子学生	男子学生	母親世代	父親世代	祖母世代	祖父世代	女子学生	男子学生	母親世代	父親世代	祖母世代	祖父世代			
Ⅲ ステータス	ⅢⅢ 教養がある	4.0	4.2	3.3	3.6	3.5	3.9	ⅢⅢ 高経済力	3.2	3.6	3.0	3.1	3.5	3.8	ⅢⅢ 高学歴	3.4	3.7	3.0	3.2	3.4	3.5
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>母親、男学>母親・父親・祖母	p<.001	男学>母親、祖母・祖父>母親	p<.05	男学>母親									p<.05	男学>母親					
平均値	ⅢⅢ 魅力的容姿	3.1	3.5	3.1	3.2	3.1	3.3	ⅢⅢ 仕事の安定	3.7	3.9	3.1	3.5	3.6	4.2	ⅢⅢ 高地位	3.1	3.8	2.9	2.9	3.4	3.3
年代男女間差有意確率・多重比較結果	n. s.														p<.001	男学>女学・母親・父親					
平均値	ⅢⅢ 若々しい印象	3.3	3.6	3.2	3.5	3.3	3.4														
年代男女間差有意確率・多重比較結果	n. s.																				
Ⅲ 人柄	ⅢⅢ 穏やか	4.2	4.2	3.8	3.9	3.8	4.0	ⅢⅢ 従順	3.2	3.3	3.0	3.2	2.9	3.0	ⅢⅢ 冷静	4.1	4.0	3.6	3.8	3.6	4.1
年代男女間差有意確率・多重比較結果	n. s.							n. s.							p<.01	女学>母親					
平均値	ⅢⅢ 気配り	4.3	4.3	3.8	3.8	3.7	4.0	ⅢⅢ 思いやり	4.3	4.3	3.9	3.9	3.9	4.0	ⅢⅢ 自信	3.7	3.8	3.4	3.3	3.5	4.0
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>母親・父親・祖母	p<.01					p<.01							n. s.						
平均値	ⅢⅢ 敬う	4.2	4.2	3.8	3.7	3.7	4.0	ⅢⅢ 積極的	3.7	3.8	3.5	3.4	3.6	3.8	ⅢⅢ 強い意志	4.0	4.0	3.4	3.6	3.8	4.0
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>父親・祖母	n. s.					n. s.							p<.05	女学>母親					
Ⅲ 結婚出産	ⅢⅢ 結婚する	3.6	3.9	3.1	3.7	3.6	3.9	ⅢⅢ 20代結婚	3.1	3.3	2.8	3.4	2.9	3.0	ⅢⅢ 子どもをもつ	3.5	3.8	3.2	3.7	3.6	4.0
年代男女間差有意確率・多重比較結果	n. s.							n. s.							n. s.						
平均値	ⅢⅢ 無離婚歴	3.5	3.7	2.8	3.3	3.2	3.1														
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.05	男学>母親																			
Ⅲ 家庭役割	ⅢⅢ 家事	3.6	3.4	3.1	3.6	3.1	2.6	ⅢⅢ 稼ぎ手	2.9	4.1	2.5	2.9	3.8	4.2	ⅢⅢ 育児	3.7	3.5	3.4	3.7	3.1	2.7
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>祖父、男学>祖父、父親>祖父	p<.001	男学>女学・母親・父親、祖母・祖父>女	p<.001	女学>祖母・祖父、父親・母親>祖父、男		p<.001	男学>女学・母親・父親・祖母・祖父>女						p<.001	女学>祖母・祖父、父親・母親>祖父、男					
平均値	ⅢⅢ 家族代表	2.9	3.9	2.8	3.2	3.6	4.3	ⅢⅢ しつけ	3.7	3.6	3.3	3.7	3.3	3.3	ⅢⅢ 介護	3.0	3.3	2.9	3.3	3.1	3.2
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.001	男学>女学、祖母・祖父>母親、男学>母	n. s.					n. s.							n. s.						
Ⅲ 婚家	ⅢⅢ 親の世話	2.6	3.1	2.6	3.2	3.0	3.1	ⅢⅢ 同居	2.3	2.5	2.4	2.8	2.8	2.7	ⅢⅢ 宗教	1.9	2.1	2.1	2.5	2.2	2.0
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.05							p<.05							n. s.						
平均値	ⅢⅢ 姓	3.2	2.3	2.9	3.3	2.4	2.3	ⅢⅢ お墓	2.6	2.3	2.4	3.2	2.5	2.2							
年代男女間差有意確率・多重比較結果	p<.001	女学>男学、女学・父親>祖母・祖父	p<.01	父親>男学・祖父				p<.01	父親>男学・祖父												

* 多重比較結果は、p<.05のみ記入。

* 「女学」は女子学生、「男学」は男子学生を示す。

手」「家族代表」などで若年世代同様に高く、母親世代よりも家庭役割における従来の性役割分担を望ましいとはしない意識がみられていた。さらに「家庭役割」について父親世代と祖父世代に違いがみられ、祖父世代は若年世代よりも男性に「家事」「育児」を求められない社会を望んでいたが、父親世代にはこの差はみられておらず望ましい社会についての男性の世代間差が示唆された。また母親世代は、有意差はみられなかったが女性の婚家の「親の世話」が他世代よりも低く、男性の婚家との「同居」が高い傾向を示し、現実直面する年代ならではの結果を示唆した。

自分自身が望む性役割

では、自分自身はどのような性役割を担いたい

と考えているのだろうか。ステータス、人柄、結婚・子どもをもつ、の各項目は男性も女性も3～4点台にあり、男女ともにそれらのイメージを希望する方向にあった。世代と男女の2要因で行った分散分析では、交互作用は家庭役割の「家事」のみにみられた。男女間の主効果は、ステータスのうち、「高経済力」(p<.001)「高学歴」(p<.01)「仕事の安定」(p<.001)「高地位」(p<.001)でみられ、いずれも男性が有意に高く、「魅力的容姿」では差が見られなかった。人柄では「自信」(p<.05)「強い意志」(p<.05)のみに性の主効果がみられ男性が女性より高かった。結婚・子ども、家庭役割では、「家事」(p<.01)「育児」(p<.001)で女性が有意に高く、「稼ぎ手」(p<.001)「家族代表」(p<.001)で男性がより高く、従来の男女の家庭

役割を踏襲した結果が示された。交互作用がみられた「家事」では、女性では若年世代が親世代よりも高く ($p<.05$)、男性では若年世代が祖父母世代よりも高かった ($p<.01$)。しかし、「子どもを持つ」で男性が高く ($p<.05$)、「結婚」では男性が女性よりも高い傾向がみられた。また、婚家では「姓」($p<.001$)「お墓」($p<.01$)のみに差が見られ女性が男性より有意に高かった。

これらの結果を男女年代別で差の検定を行った結果(独立一要因の分散分析 表2 年代男女間差有意確率・多重比較結果)からみると、ステータスでは「若々しい印象」以外すべてに群間差があり、男女学生で「教養がある」、男子学生で「高経済」「高学歴」「仕事の安定」「高地位」が母親より有意に高かった。男女学生の差は「高地位」のみ有意で、男子学生の方が高かった。また「高経済力」では祖父世代と祖母世代が、「仕事の安定」では祖父世代が母親より有意に高かった。これらの結果から、自身が望む性役割では男子学生と祖父世代でステータス関連項目が高く、女子学生、母親世代と父親世代がそれよりも低かった。人柄では「冷静」、「気配り」「思いやり」(多重比較有意差無し)、「敬う」「強い意志」に群間差がみられ、ステータスとは異なり、女子学生が他の世代男女よりもそれらを望んでいた。結婚・子どもをもつことでは、「無離婚歴」のみに群間差がみられ、男子学生が母親より高かったが、その他には群間差がみられなかった。家庭役割では、「しつけ」「介護」では世代間差がみられず、「家事」で祖父世代が女子学生・男子学生・父親世代より低く、「稼ぎ手」では男子学生と祖母世代・祖父世代が女子学生・母親世代・父親世代より高かった。「育児」では祖父世代が若年世代、親世代よりも低く、「家族代表」では、親世代よりも祖父母世代が高く、若年世代では女性よりも男性が高かった。婚家では、「親の世話」「同居」で有意差があったが多重比較では有意差がなく、「姓」では祖父母世代よりも父親世代が高く、若年世代では女子学生が男子学生よりも高かった。お墓では男性の世代間差がみられ、父親世代が男子学生・祖父よりも高かった。

これらの結果から、自分が希望する性役割では、

結婚や子どもをもつことへの世代間差はほぼないものの、男子学生と祖父世代は男性に求められてきたステータスを望み、家庭役割や婚家との関係では、男子学生が従来女性の役割とされた役割で女性との差がなくなっているのに対し、祖父世代がこれまでの男女の性役割に沿った役割を望んでいた。一方で、父親世代は若年世代や各女性世代に近い傾向を示し、祖父世代と父親世代との違いが示唆された。さらに、祖父世代が家庭役割では従来の男女役割観に沿った役割を望む傾向があるのに対し、祖母世代は母親世代よりも自身に「高経済」を求められたいとし、女子学生や母親世代よりも「稼ぎ手」や「家族代表」となることを望み、結婚相手の姓を名乗ることを女子学生や父親よりも望んでいなかった。

性役割に関する世代特徴

上記の結果からそれぞれの世代のもつ特徴をみると、若年世代は、望ましい性役割社会の認識として伝統的な性役割観は維持しているものの、男性に求められていたものを女性にも、女性に求められていたものを男性にも求めるように変化した性役割観に基づいていると考えられる。若年女性はかつての性役割社会から変化した現在の性役割社会を当たり前として受け取りつつ受容しており、同様に若年男性も、これまで主に女性の役割とされてきた家庭役割や婚家との関係を当たり前のこととして男性も担うおうとしていた。しかし、若年男性は、その中でもステータスにあるような社会的な成功を求められているとも感じ、そのようにありたいと望んでいる世代、と捉えられる。一方で親世代は、母親世代は、ほとんどの問いに他の世代男女よりも肯定的な得点が低く、性役割という役割分担観には消極的であるが、時代の変化に伴う男女の役割分担になじみ、非積極的に家庭や婚家にあったこれまでの女性役割を男性に求めていた。これに対し父親世代は、男性と女性の平等な関係性が求められていることを認識し、従来の男女の性役割を見直し、自身もそうあらうと模索している世代と考えられる。いうなれば、若年世代が変わってきた男女の役割分担を当たり前として自分達の生き方を選択しているのに対し、

親世代は男女の機会均等に基づいた変化した性役割観を観念的に意識しつつ、現実の生活との整合性の中で揺らいでいると言えるかも知れない。さらに、ウーマンリボル्यूションを経験した世代にあたる祖父母世代では、祖母世代は現実にはかつての性役割に基づいたイメージをもち、生活をしながらも、女性も男性と同等にありたいとする意識は強く、一方で祖父世代は多様な性役割社会を受け入れようとしながらも自分自身はこれまでの男女の性役割に従っていたいと望んでいた。

再び「保守化」考

本研究は、青年期女子に伝統的なジェンダー観を支持する「保守化」と言われる現象が生じているとする指摘（谷田川，2007）に対して、青年期女子の性役割観を同性代の男性、親世代、祖父母世代のそれと比べることにより検討することになった。本研究の結果からは、若年女性は「望ましい性役割社会」では、女性も「仕事の安定」「高地位」が求められ、従来女性に求められていた人柄を男性にも求められると考え、男性にも「家事」「育児」「しつけ」が求められるとし、従来の性役割による差が減少した社会と捉えていた。これに対し、自分自身はどの役割を望むかを尋ねた「自分自身が望む性役割」では、「望ましい性役割社会」でみられた母親世代との差が減少し、ステータスでは従来の男性イメージには男性がより高く、人柄では男性も女性イメージを求められることを望んでいた。家庭役割では従来の女性役割とされていた「家事」「育児」「しつけ」では若年男性との差がなく、「稼ぎ手」「家族代表」では若年男性よりも低かった。これらの結果からは、若年女性は、望ましい性役割社会では女性も仕事をし、高い地位を得ることを期待されていると感じ、一方でこれまで女性に求められていたイメージや役割を男性も担う社会が望ましいと感じていた。しかし、自分自身が望む性役割社会の結果からは、男性に求められるようなステータスは望まず、女性的な人柄イメージは高いことを望むが、家庭役割等ではこれまで女性が担っていた役割を男性も担うものにとらえつつ、これまでの男性役割を積極的には望まないと、捉えられた。このことは伝統

的な男女の役割分担を支持するというよりは、むしろこれまで女性の役割とされてきた負担は男性も担うべきものという現在の性役割社会観に基づき、その上で男性の役割を女性が担おうとは思わない、という状態にあるように見える。男女均等社会の中で育った若年世代は、祖母世代のようにあえて「男性の役割」とされてきたものを望むのでもなく、若年男性世代よりも男／女らしさに縛られもせず、各々がより自分が興味や好感をもつイメージや役割を柔軟に選択することが許されている世代、と捉えることができるのではないだろうか。再「保守化」と言われる現象は、このような背景のもとに生じたものと考えられた。

本研究の限界と残された課題

本調査における問題点を最後に記しておく。ひとつは、この調査は本学の学生とその保護者、筆者らの知縁法により調査協力者を募った。そのため、回答者の偏りが予想される。この偏りが年代特徴に影響している可能性があるかもしれない。次に、サンプル数の偏りの大きさである。女子学生サンプルが多く、他の年代との差が大きかったことが分析に影響している可能性がある。これらの点で、本調査は試行的な探索的な域を出ない結果ではあるが、それでも男女別3世代の特徴傾向を抽出することができた。これらの特徴の検証は今後の課題である。

文献

1. 柏木恵子 1975 東京女子大学附属比較文化研究所紀要, 36, 101-109.
2. 松田茂樹 2005 性別役割分業意識の変化－若年女性にみられる保守化のきざし－ LifeDesign REPORT 9, 24-26.
3. 守 秀子 2010 大学生における性役割認知の変化, 文化女子大学長野専門学校研究紀要, 2, 19-32.
4. 内閣府男女共同参画局 2016 男女共同参画白

書 平成28年版, 第2節 企業における女性の
参画 図 I-2-12

5. 奥田由意 2015 女性は本当に管理職になりたくないのか, プレジデントウーマン2015年8月7日号
6. 谷田川ルミ 2007 女子代学生のジェンダー意識をめぐる一考察 ―伝統的なジェンダー観を支持する層に着目して― 日本教育社会学会大会発表要旨収録, (59), 179-180.
7. 山根律子・別井春香・宮内萌 2017 青年期女子の性役割観における『保守化現』現象の再検討 ―今の社会における性役割に対する認識, 理想とする性役割社会, 自身が望む性役割のギャップから― , 青山心理学研究, 17, 71-81.
8. 若松素子・柏木恵子1984 女性の性役割認知, 東京女子大学紀要論集, 34(2), 61-81.